近代日本の画家とイスラーム美術―児島虎次郎、南薫造、吉田博を中心に―

鎌田由美子（慶應義塾大学）

明治期以降の日本の芸術家とイスラーム美術のかかわりは、ほとんど研究されていない。そこで発表者は既に、建築家の伊東忠太がイスラーム建築・美術の紹介者としての役割を果たしたこと（拙稿「近現代日本とイスラーム美術・建築―その紹介者としての伊東忠太－」『慶應義塾大学日吉紀要　人文科学』37（2022)、99－125 頁）や、岡田三郎助、児島虎次郎、富本憲吉がヨーロッパ留学中にイスラーム美術に出会い、影響を受けていたことを明らかにした（拙稿「イスラーム美術と日本の芸術家－岡田三郎助、児島虎次郎、富本憲吉をめぐって―」『慶應義塾大学日吉紀要　人文科学』38 (2023)、57－87 頁)。

これに続いて本発表では、南薫造（1883－1950）と吉田博（1876－1950）に焦点を当てる。彼らの作品や著述を丹念に辿ると、両者がイスラーム美術から大きなインパクトを受けていたことが判明した。南薫造は、1907 年から 1910 年までイギリスに留学し、ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館（以下 V&A）などでイスラーム美術品をスケッチした。1908 年ごろの「春」（ひろしま美術館所蔵）の背景に、V&A 所蔵のトルコのイズニク・タイルを描いていることや、『美術新報』などの雑誌の装丁に、V&A でのイスラーム美術品のスケッチが応用されていることが明らかになった。南は、イスラーム美術品を直接的にその作品に取り入れた最初期の芸術家として特記すべき存在である。さらに南は、ともにイギリス留学をしていた富本憲吉が、イスラーム遺跡の調査のためにインドに行くと、その様子を聞き、自らも 1916 年にインドに赴き、作品に描いた。

一方、吉田博は、1904 年からの 2 度目の渡米後はヨーロッパに渡ってアルハンブラ宮殿などを巡り、モロッコやエジプトに滞在してイスラーム世界を体験し、1907 年に帰国した。1910 年には『写生旅行　魔宮殿見聞記』（森鴎外序文）を著し、アルハンブラ宮殿やイスラーム時代のスペインについて紹介した。1930 年からインドに行き、名高い版画作品「タジマハルの庭」（1931 年）などを手掛けるが、そこには、若き日のイスラーム体験を契機としたイスラーム遺跡・美術への深い関心があると考えられる。

南、吉田とほぼ同時代に渡欧した藤島武二もイスラーム圏の絵画や工芸品のスケッチを残している。児島虎次郎のように、蒐集したイスラーム美術品を工芸品のデザインなどに生かそうとした芸術家もいたが、ヨーロッパでイスラーム美術に開眼した芸術家の多くは、それを直接的には作品に反映していない。しかしながら、富本憲吉が若いころの V&A でのスケッチが自分の仕事の礎になったと述べているように、彼らの養分となっているのである。現在ではほとんど認識されることもないが、近代日本の画家が留学して学んだもののなかにはイスラーム美術も存在したのである。